前

令和８年度

一般選抜前期日程入学試験問題

総合問題

注意事項

1　試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。

2　問題冊子（16ページ）には、解答用紙３枚と下書き用紙２枚が挟み込んであります。試験開始の合図があったら、直ちに中を確かめ、印刷や枚数の不備などがあった場合、監督者に申し出なさい。

3　問題冊子の間に挟み込んである解答用紙を取り出し、すべての解答用紙の所定欄に受験番号を記入しなさい。

4　解答はすべて、解答用紙に横書きで記入しなさい。間違って下書き用紙に記入しても、回収しません。

5　句読点は、一字と数えなさい。

6　試験室で配付された問題冊子及び下書き用紙は、退出時に持ち帰りなさい。

このページは白紙です。

このページは白紙です。

問　題

課題文①・②・③を読んで、次の問いに答えなさい。

問１　課題文①において、能力主義社会にはどのような長所があると述べられているか。貴族社会と対比させながら100字以内で説明しなさい。

問２　課題文①下線部(ア)「反対の見方」とはどのような見方か、180字以内で説明しなさい。

問３　課題文①下線部(イ)「哲学者は一般的な意見を特徴づける道徳的直観と対立する」とはどういうことか、120字以内で説明しなさい。

問４　課題文②下線部(ウ)に「ヨーロッパでは不平等度が高まると人々は幸福感を感じなくなるのに対して、アメリカ人は不平等度が高まっても幸福感が影響を受けない」とあるが、それはなぜだと述べられているか、100字以内でまとめなさい。

問５　課題文②下線部(エ)「所得階層間の移動可能性」とほぼ同じ意味の６文字の言葉を課題文①から抜き出しなさい。

問６　課題文③における筆者の主張を100字以内でまとめなさい。

問７　課題文①・②・③を踏まえ、あなたは「不平等」とはどういうことだと考えるか、また、その不平等に対してどのように対応できると考えるか、400字以内で述べなさい。

著作権保護の観点により、公表できません。

著作権保護の観点により、公表できません。

著作権保護の観点により、公表できません。

著作権保護の観点により、公表できません。

著作権保護の観点により、公表できません。

著作権保護の観点により、公表できません。

著作権保護の観点により、公表できません。

マイケル・サンデル著、鬼澤忍訳『実力も運のうち　能力主義は正義か？』
（早川書房、2021 年）による。一部改変。

注

＊1　アファーマティヴ・アクション……社会的弱者への優先的な配慮を通じて、平等を実現しようとする取り組み。

＊2　中道左派……極端でない革新的な思想を持つグループ。

＊3　中道右派……極端でない保守的な思想を持つグループ。

課題文②

そもそも所得格差の拡大は、問題なのだろうか。人々は本当に所得格差拡大を問題だと思っているのだろうか。格差拡大を問題視する人がいる一方で、日本が過度の平等主義にあったと考えている人は、格差拡大を歓迎しているかもしれない。

筆者は「所得格差の拡大は問題であると思うか否か」を直接アンケート調査で人々に質問してみた。その結果によれば、所得格差拡大に肯定的なのは、高学歴者、高所得者、高資産保有者であり、所得格差拡大に否定的なのは、貧困者・ホームレスの増加を実感している人と、危険回避的な人である。

所得格差の拡大がどんなものでも問題だというわけではない。格差拡大の理由によっては、格差拡大に賛成する人も多くなる。内閣府の「国民生活選好度調査」によれば「個人の選択や努力の違いによる所得等の格差は当然である」という考

え方を肯定する人は、日本人の７割であり、年収が高い人ほどその割合が高い。一方で、「個人の持って生まれた能力が異なるために、所得等の格差は当然である」という考え方を肯定する人は約５割であり、年齢が高いほど肯定的である。また、能力主義的な人事・賃金制度についても４割の人が肯定的であるという。つまり、努力や能力による所得格差を認める人は結構多い。筆者自身が行ったアンケート調査でも、同じような結果が出ていた。

ところで、所得の不平等度が高いことを不幸なことだと考えるのは、万国共通なのだろうか。ハーバード大学のアレジーナ教授らは、ヨーロッパ（ＥＵ諸国）とアメリカについて、膨大なデータを用いて比較研究を行った。彼らの研究によれば、(ウ)ヨーロッパでは不平等度が高まると人々は幸福感を感じなくなるのに対して、アメリカ人は不平等度が高まっても幸福感が影響を受けないという。

この違いを説明する二つの仮説がある。第一の仮説は、「ヨーロッパの人々は平等を好むがアメリカ人はそうでない」という「平等感の違い仮説」と呼べるものだ。危険に対する態度の差もその一つである。第二の仮説は、「アメリカでは、所得階級間の移動率が高いので、現在貧しいことは必ずしも将来の貧しさを意味しない。そのため、所得格差が高いことそれ自体は不幸に結びつかない」という「所得階層間移動仮説」と呼べるものである。

彼らは、左派か右派かというイデオロギー別、所得階層別に、不平等と幸福感の関係を分析することで、これらの仮説を確かめた。左派と右派というイデオロギーによって不平等が幸福に与える影響が異なり、左派と右派の比率がアメリカとヨーロッパで違うのであれば、第一の「平等感の違い仮説」が成り立つ。一方、ヨーロッパの低所得の人々が不平等を特に気にしているのであれば、第二の「所得階層間移動仮説」が成り立つ。

結果は、「所得階層間移動仮説」と整合的であった。アメリカ人で不平等を気にしているのは、貧しい人々ではなく、豊かで左派の人々である。一方、ヨーロッパでは、左派だけでなく、貧しい人々も不平等は不幸であると考えている。左派の人々が平等を重視するのは同じであるが、貧しい人々が不平等を不幸だと感じるのは、ヨーロッパに限られているのである。ヨーロッパの方が、アメリカに比べて、所得階層間の移動率が低いことが、ヨーロッパで所得の不平等が深刻な問題だと考えられる理由なのである。

日本は、アメリカとヨーロッパのどちらに近いのであろうか。日本では、実際

には所得格差がそれほど拡大していないにもかかわらず、所得格差の拡大について大きな関心がもたれている。また、「所得格差の拡大は問題だ」と考える人は、所得や資産が低い人々に多い。これは、ヨーロッパの人々の不平等に対する考え方に近い。つまり、(エ)所得階層間の移動可能性が低い社会になっていることを反映しているのではないだろうか。仮に、階層間の移動の可能性が高ければ、現在所得が低い人であっても、努力すれば高所得者になることが可能であるので、努力の結果格差が生じることを容認するはずである。

大竹文雄『経済学的思考のセンス』(中公新書、2006年)による。一部改変。

課題文③

当事者になるか否かの分かれ目に、「たまたま」という本人の選択に帰結できないような要素が少なからずあります。上段に立った者、下段に転げ落ちた者。勝ち組になることも、負け組になることも、この「たまたま」と無縁ではありません。負けたのも本人のせいばかりとはいえません。ですから、勝ったからといって必要以上におごることもないですし、負けたからといってそんなに落ち込むこともありません。勝ったこと、負けたことをどう位置づけるかは、これからの生き方によるからです。評価とは、これまでやってきたことに対して下されるものですから、その意味で後ろ向きの思考です。その後ろ向きの思考を今後どう生かしていくか、あるいは変えていくかは、本人の前向きの思考によります。

もっとも、負けたことなど気にすることはないなどといっても、実際にはそうはいかないでしょう。何年もその日の勝負のために準備してきた者にとって、負けたという事実はそれなりに重いものです。しかし、結果というものは一瞬です。何事にも結果があって、その結果は良いときもあれば悪いときもあります。一瞬の結果にどれくらいすがっていくか。それは本人のこれからの生き方次第です。人生はつながっているので、一つの結果がでてもまた次の結果があります。ですから、一つの結果ばかりに気をとられていても、次には進んでいきません。あるときは悪い結果であっても、いくつもの結果を受け止めていくうちに、実はその

ときの結果が悪いとばかりもいえなかった、ということだってでてくるかもしれません。時には立ち止まって少し休んだり、これまでを振り返ってみたりすることも大切です。ここで大事なのは、いまの結果を最終的にどう位置づけるかは、これからの生き方によりけりだということです。

貧困に陥るリスクは特別な者だけにあるのではなく、われわれすべての者が抱えています。いくらヒルズ族といわれ、勝ち組と賞賛されようが、貧困は彼・彼女らにとっても、他人ごとではありません。この視点こそが貧困を語る際に重要なのです。なぜなら、どうしてヒルズ族になれたかには、多くの場合、「たまたま」の要素が入っていて、貧困にいたっても、いわれなき要素と無縁でないからです。

しかし、「たまたま」の要素を指摘することは、一生懸命努力しなくても結果は同じだ、といっているのではありません。むしろ、その逆です。一生懸命努力することは素敵なことだし、一生懸命生きることもかっこ悪いことではないのです。ただ、人生そのときどきに出てくる結果を、「すべて自分のせいだ」と必要以上に「重く」とらえることはないということです。いまの結果を、これからどのように生かし変えていくかは、本人次第なのですから。

ここで「たまたま」という不確実な要素を指摘するのは、短絡的な自己責任論に対する警告でもあります。一つの結果を自己責任のみに帰結させることができないのは、その結果を導いたのが自分のせいだけでない「たまたま」の要素がそこに介入するためです。

例えば、不況の時期に就職活動があたった場合、うまく職につけない状況を怠け者だからとか、積極性が足らないからだというだけでは済まされない面が少なからずあります。社会への最初の扉を開ける時期が、どのような状況にあるかによって、彼・彼女ら自身のその後の職歴にも違いがでてきます。あまるほどの企業からの採用通知を受けた者もいるでしょうし、何社も申し込んでやっとの思いで手に入れた採用通知にほっとすると同時に、実際その仕事についても第一希望への未練が残る人だっているでしょう。就職市場が厳しい時期に仕事についた者の離職率が高いことはすでに指摘されています。このように、就職活動一つをとっても、たまたま時期が悪かったというバッド・ラックが、単なる一時的な運の悪さだけでなく、その後の職業経歴にも影響を及ぼすことが少なくありません。どんな時代に生まれ、どんな状況の市場に参入するか、といった「たまたま」の要素が、個人の人生に影響を及ぼします。自己責任だけで個人の選択を処理でき

ないメカニズムが存在するわけです。

ただその一方で、個人の責任を無視してもよいというわけではありません。大人になるということは、自分でやったことに対して責任をとることが期待されるということでもあります。ある選択をしたことは、周りの状況がどうであれ、最終的には当人が下した結果なのですから、個人の意志がまったく介入しないということはありません。どうしてその結果にいたったのか。どうしてその選択肢を選んだのか。このような選択過程には、たまたまの要素が入る半面、行為の当事者としての意志もからむのです。たまたまの要素にどれだけ抵抗できるか、あるいは甘んじてしまうかは、本人の「ちから」によります。たまたまの要素への抵抗力や対応力は、どの程度の体力や資力・財力をもっているか、どの程度の支援ネットワークをもっているかというような「蓄え」の量によって異なってきます。

多様でかつ充実した蓄えをもつ者が、たまたまのリスクへの対応力が高い傾向にあります。それは、天災という無差別に降りかかってくるリスクも、この「蓄え」をどの程度もっているかによって違ってきます。例えば、地震があったとしても、高級住宅街では家そのものが頑丈に設計されていて、そうやすやすと倒壊しません。一方、家が倒れてその下敷きになり、多くの被災者をだすのは、比較的貧しい地域でしょう。災害リスクはだれにも降りかかるものですが、そのリスクが実際にどの程度のダメージをもたらすかは、人によって、家族によって異なるのです。それが格差、不平等となって社会に顕在化していきます。

白波瀬佐和子『生き方の不平等——お互いさまの社会に向けて』
（岩波新書、2010年）による。一部改変。